

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 16 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13066

研究課題名(和文) グローバル時代のメディア倫理：人道主義、コスモポリタニズム、ケアの倫理の視点から

研究課題名(英文) Media ethics in the age of globalization: with the exploration of humanitarianism, cosmopolitanism and the ethics of care

研究代表者

林 香里 (HAYASHI, Kaori)

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：40292784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はデジタル情報化、グローバル化の中、メディアの倫理についてコスモポリタニズムと人道主義の観点から検討を試みるものである。欧州では、メディアはグローバル化の文脈に置かれ、とくに「遠くの苦しみ」への共感と連帯の創出が、その倫理的なあり方として問われている。研究代表者は、米国、英国、ドイツに滞在した後、その実践と知見に基づきマイノリティとメディアに関する一般向けのシンポジウムを2度開催した。また、商業主義および一握りのテクノロジー企業の寡占状態の進行によってメディアの倫理が侵食されていく世界のメディア状況について新書を著し、メディアの困難をグローバルなコンテキストで問いかけた。

研究成果の概要(英文)：This project explores the media ethics in the age of digitalization and globalization from the point of view of cosmopolitanism and humanitarianism. In the context of globalization, media is particularly expected to create empathy and solidarities for "distant sufferings". The principle investigator of this project stayed in the U.S., U.K. and Germany and contacted relevant researchers in this area and took part in related projects and activities in 2016. Based upon this experience, she held two workshops concerning minorities and media in 2017 in Tokyo. She also published a book for the general public in order to problematize the pervasive erosion of media ethics world-wide in the face of commercialization and digitalization that have caused monopolization of information by a handful of powerful technology companies.

研究分野：メディア・ジャーナリズム研究

キーワード：メディア倫理 人道主義 ケアの倫理 コスモポリタニズム 社会運動 表現の自由 マイノリティ

### 1. 研究開始当初の背景

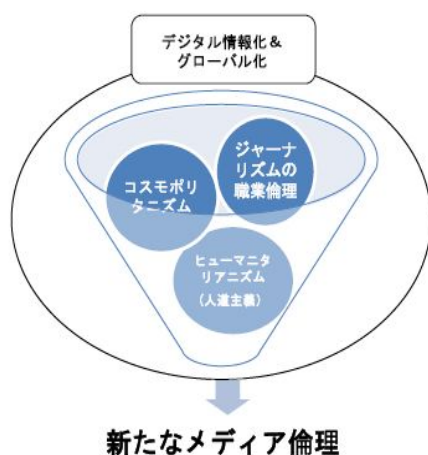
グローバルゼーションによって多くの人が移動する現代、地球規模で環境開発問題や人権問題がテーマとなっている。つまり、メディアは、今日的なコスモポリタニズムと人道主義をけん引し、現代社会の「遠くの人たちの苦しみ」に関する「共感」と「責任分有意識」を創出する装置であることから、欧米ではグローバルに責任あるメディア倫理の構想についての研究がさかんである。

この議論の流れの中心テーマは、19世紀に発達した「言論の自由」「事実と意見の区別」「権力の監視」といった情報送り手側に限定される職業規範理論とは異なる、オーディエンスへの効果や帰結にも配慮したメディアとグローバル社会とをつなぐ、メディアの新たな道徳的あり方の考察だ。いまのところ、日本のメディア研究はこのテーマに未着手であるため、本研究によって最新の国際研究動向にキャッチアップし、現代社会のメディア倫理をバージョンアップしたいと考えた。

### 2. 研究の目的

グローバル化によるネオリベラリズムの進行により、地球規模の経済格差はますます顕著になっている。それに伴い、世界中の人権に関する問題意識もグローバルな広がりをもって議論されている。他方で、マスメディアは、近代の装置として国民国家の枠組みで発展し、そこにジャーナリズムの営為や職業倫理も重ねられてきた。このため、これまでのジャーナリズム倫理、ならびに職業実践にも、グローバル化社会においては限界がある。

そうした中で、デジタル化、グローバル化がさらに進むいま、コスモポリタニズム、ジャーナリズム、ヒューマニタリアニズム(人



道主義)はどのように混ざり合っていくのか、そして新たなメディア倫理を生み出すことは可能なのか、海外の研究動向を追跡するとともに、日本における含意、ならびに実装までもを試みる。

### 3. 研究の方法

研究の方法は、主に海外の査読ジャーナルも

含めて、海外を中心とする文献の渉猟が中心であるが、さらに海外の実務家および研究者へのインタビューも精力的に行った。以下、その概要である。

1) 2015年8月, 2016年6月 University of Pennsylvania Annenberg School of Communication Prof. Barbie Zelizer Zelizer氏は、ISISのネットによる映像発信でジャーナリストの処刑場面などを宣伝して世界を震撼させたが、こうしたネット映像の使い方と現代メディア倫理とを研究している。テレビ映像では放送されない残虐な映像はしかし、グローバルなテロリズムの核心を語るものであり、それを報道することについての課題やメディアの倫理について議論した。

2) 2016年4月~12月 University of Illinois Chicago, Department of Communication Prof. Zizi Papacharissiと意見交換、ワークショップでレクチャー。Papacharissi氏は、社会運動がデジタルネットワークを舞台に主に感情的コミュニケーションによって突き動かされているとし、そうしたコミュニケーション形式の課題と問題、および倫理的あり方を議論した *Affective Publics: Sentiment, Technology, and Politics* (2014)の著者である。

3) 2015年8月 コロンビア大学ジャーナリズムスクール、ダートセンターを訪問。同センターは、ジャーナリズムとトラウマをテーマにし、ジャーナリストたちの取材時のトラウマ、ジャーナリズムにおけるトラウマの扱い方、ジャーナリズムのトラウマ報道への接し方など、「トラウマ」と公共的言論について包括的な取り組みをしている組織である。その活動について案内を受けた。また、現在米国で注目される調査報道 NGO についてもレクチャーを受け、その一つ、Marshall Project がレイブをテーマにした調査報道が2016年にピューリッツァー賞を受賞した背景なども学んだ。

4) 2016年9月~11月 Northwestern University, School of Communication, Professor Dilip Gaonkarの大学院セミナー Rhetoric and Political Theoryに参加し、政治思想史における「レトリック」の扱いについて学び、今日の政治状況への応用について議論した。

5) 2017年1月, 2月 Department of Media and Communications London School of Economics, Professor Lillie Chouliarakiとの意見交換。Prof. Chouliarakiは、テレビニュース、写真および映像ジャーナリズム、人道キャンペーン広告や映画などの媒体を通して、市民がいかに行動の動機を惹起され、

人道的行為を行うかという点を、コスモポリタン・シチズンシップという概念から検討している。近年はとくに、デジタル化時代におけるソーシャル・メディアでの情報拡散から生まれる社会運動が旧来的テレビや写真などのメディアとどのような関わりがあるのか、とりわけ、ソーシャル・メディア利用者のために、いかにその戦略を変化させているかについて研究をしている。今回の滞在時には、そうしたソーシャル・メディア利用が生み出す「ポストモダンの」人道主義について意見交換をした。

6) 2017年3月 Margreth Lünenborg  
ドイツでは2014年から2015年にかけて100万人にも上るシリア難民受け入れを決定し、いわゆる「難民危機」を経験した。その際のドイツのメディア状況について意見交換をした。さらに、ドイツと日本における女性の描かれ方、女性に対するセクハラ問題とメディアのあり方についてなど、研究成果を議論し合った。

#### 4. 研究成果

以上のような研究交流をもとに、学術業績、研究発表を行った。さらに、2017年からは、訪問した大学の取り組みを参考にして、一般向けのメディアと表現に関するワーキンググループを立ち上げた。

調査によって得られた知見は次の点である。

- 1) ジャーナリズムは、すでに新聞テレビなどの伝統的メディアの枠を超えて、ソーシャル・メディアやYouTube、ツイッターなどの「プラットフォーム」を舞台に移している。とりわけ、アクティビズムに関連する情報交換は、こうしたソーシャル・メディア上が多い。
- 2) その上で、「遠くの苦しみ」の表現は、これまでのような戦争や飢餓のイメージではなく、セレブリティのメッセージなどに様変わりして、人道主義のメッセージのあり方が変容している。こうしたプライベートな場面で行われ、親しみやすさによる共感を惹起するような情報交換を意識した「ポストモダンの」的表象が目立つ。
- 3) 他方で、世界の「苦しみ」の現場からの声は、商業主義進行の中、メディアで行き場を失っている。グローバル化が進行しているにもかかわらず、多くの国のマスメディアは、以前としてニュース価値を国民国家単位で考えているがゆえに、海外ニュースの量は減少気味である。こうした中で、当事者からの発信が逆説的に重要になってくる。それを救い上げる主体は、伝統的なマスメディアでは限界があり、調査報道NPOや人道主義NGOによるパブリック・リレーションが担っている。

- 4) こうしたソーシャル・メディアの広がり、隆盛は、伝統的メディアのあり方を逆に規定しつつある。ソーシャル・メディア上で拡散を意識するあまり、伝統的メディアでもニュース言説の「感情化」後押しをしており、そうしたニュースほど多く読まれ、広がるのが予想される。この仮説をもとに、今後実証的な研究プロジェクトをする必要がある。
- 5) ジャーナリズムには事実を「公正中立的」に報道する機能があるために、ジャーナリストたちはアクティビズムを支持、擁護することに消極的であった。しかしながら、人権問題、人道主義などの根本的な価値に根差す運動については、ジャーナリズムそのものが向き合うべき課題であり、それを支持することはジャーナリズムの職業倫理の見直しへとつながると考えられる。
- 6) 2016年に米国に滞在した際、米国の報道界では、レイプ事件の報道のあり方と女性の人権について大きくクローズアップされており、報道と被害者救援運動の関係を観察する事例として大いに啓発された。さらに、2017年には、女性たちによる“MeToo”運動がさかんになり、グローバルな広がりを得ることになった。こうした運動の広がりも、伝統的メディアとともに、ソーシャル・メディアにも負うところが大きく、こうした動きを日本でも広げるためにはどのようなメディア戦略が必要か、実践につなげる活動について実務家や研究者と会合をもち、議論を重ねた。
- 7) 以上のとおり、海外の実務家、大学研究者たちの活動と実践を知り、さらに調査から得た知見をもとに、2016年5月からテレビ、新聞、インターネットなど、さまざまな媒体上の表現のあり方を考える市民グループ「メディア表現とダイバーシティを抜本的に検討する会 (MeDi)」を発足させ、本研究の知見を社会に還元する活動を始めている。メンバーは、NHK記者やフリーランスのジャーナリスト、大学教員たちである。2016年5月20日にキックオフシンポジウム、同年12月16日に第二回シンポジウムを開催し、女性の人権保護につながるメディア表現の多様性を市民と考える場を提供した。第一回のシンポジウムでは、「ちゃぶ台返し女子アクション」大澤祥子、UNWOMEN アジア太平洋部長 加藤美和、エッセイスト 小島慶子、ジャーナリスト 白河桃子、日経 DUAL 編集長 羽生祥子、弁護士 緑川由香、大妻女子大学准教授 田中東子を迎えて、メディアの差別的表現がなぜ人権侵害につながるのかについて討論した。第二回では、そうした差別的表現が起こる背景について、国際的な視点も含めて

さらに掘り下げるために、鎮目博道(株)テレビ朝日/AbemaTV、報道局クロスメディアセンター/編成制作局制作部プロデューサー、高田聡子 マックアンエリクソン・クリエイティブディレクター、千田有紀 武蔵大学社会学部教授、伊東正仁 損保ジャパン日本興亜 取締役常務執行役員、小島慶子 エッセイスト、治部れんげ ジャーナリスト/昭和女子大学現代ビジネス研究所研究員を招いて、討論した。両回とも200人収容の会場は満員となり、現代社会におけるテレビ、ネットなどさまざまなメディアの倫理と人道主義について、平易な言葉で、映像を見せながら、わかりやすく問題提起を行った。

- 8) 以上のとおり、現代のグローバルなコスモポリタンのメディア倫理には、これまでにない多様性に対するセンシティブイティがもっとも必要である。そうした共感を醸成するためには、人種、ジェンダー、社会階層など多様性を尊ぶジャーナリストの存在が重要である。多様性はこれまで日本のメディアにおいて価値の問題としては強調されてこなかった。今後は記者の取材現場、ニュースルームなどで積極的に取り入れていく倫理としてさらに考察を深めたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

1. 林香里「届けられなかった声 新聞産業の衰退と忘れられていく人々」『メディア展望』2017年8月号、公益財団法人新聞調査会発行。1-5頁。(査読なし)
2. 林香里「ソーシャル・メディアに翻弄されるアメリカ トランプ大統領誕生と日本のジャーナリズムの課題」『世界』105-115頁、2017年1月。(査読なし)
3. 林香里「日本におけるメディアの公共性を探して—国際比較調査から」『学術の動向』Vol. 20, 2015年12月、62-67頁、日本学術会議。(査読なし)
4. 林香里「報道検証」はジャーナリズムをよくするか—朝日新聞社第三者委員会委員の仕事を終えて」岩波書店『世界』2015年5月号、56-64。(査読なし)

[学会発表](計 6 件)

1. Kaori Hayashi How relevant is corporate journalism to our society today? Presentation at the Workshop: Contemporary Crises in the Asia-Pacific Hosted by Sophia University Institute of

Comparative Culture in cooperation with Japan Focus: The Asia-Pacific Journal. At Sophia University, July 1, 2017. (査読なし)

2. Kaori Hayashi “Journalism of Care: An alternative ethic of media in the digital information age” at the University of Illinois, Chicago, Department of Communication, Nov.9, 2016. (査読なし)
3. Kaori Hayashi “Digitization, professionalization, and feminization. Changing newsroom culture in Japan.” Presented at the ICA Fukuoka, Hilton Fukuoka, June 11, 2016. (査読あり)
4. “Comparative Global Assessment of the Media Coverage of Japan’s “Comfort Women” Issue.” ICA Panel Session. Session chair and panelist: Kaori Hayashi. Other panelists: Sunyoung Kwak, Kayoung Kim, Jiyoung Kim, Cesar Castellvi, Omri Reis. Hilton Fukuoka, June 10, 2016. (査読あり)
5. ソウル大学アジア研究所主催 重点セミナー講演会 慰安婦問題と戦後日本講演タイトル「Never having to say I am sorry? Asahi’s comfort women reporting scandal amid the Abe administration」2015年10月16日13時~16時。永遠ホール(210号室)にて。司会: チョン・ジョンソン教授(ソウル大社会学科、UN人権理事会諮問委員会副議長、国連人権政策センター共同代表)- ディスカッション: パク・ジョンエ研究教授(東国大学校)、カン・ソンヒョン研究教授(聖公会大学校。発表者、林香里、豊秀一(朝日新聞社))(査読なし)
6. 「デジタル・メディア空間における「女性」性: その両義性の批判的検討」司会・共同企画者、日本マス・コミュニケーション学会春季研究発表会、同志社大学。問題提起者: 瀬地山角(東京大学) 討論者: 田中東子(大妻女子大) 司会: 林香里(東京大学) 2015年6月14日。(査読あり)

[図書](計 2 件)

1. 林香里『メディア不信 何が問われているのか』岩波新書、256頁、2017年11月22日。(査読なし)
2. Kaori Hayashi “A journalism of care”, In *Rethinking Journalism Again. Societal Role and Public Relevance in a Digital Age*. Edited by Chris Peters and Marcel Broersma, Routledge, 2016, 146-160. (査

読あり)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

林 香里 (HAYASHI, Kaori)  
東京大学・大学院情報学環・教授  
研究者番号：40292784

##### (2) 研究分担者 なし

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者 なし

( )

研究者番号：

##### (4) 研究協力者 なし

( )